

# 祓川の渡船哀話 わたし ぶね あい わ — 竹川 —

町内を流れる祓川は櫛田川の分流で全長およそ十四キロメートル、中海、佐田、前野、養川、浜田を経て伊勢湾に注いでいます。

現在はこの川にもコンクリート橋がいくつも架けられていますが、天正年間（安土、桃山時代）に松阪の稲木から齋宮竹川に入る新参宮街道ができてから、紀州候がきしゅうこうこの川に渡船場をつくり、舟を渡して舟賃を取っていました。

ある年のこと、ひどい嵐にみまわれ、祓川は水かさが増え、大洪水の状態でした。

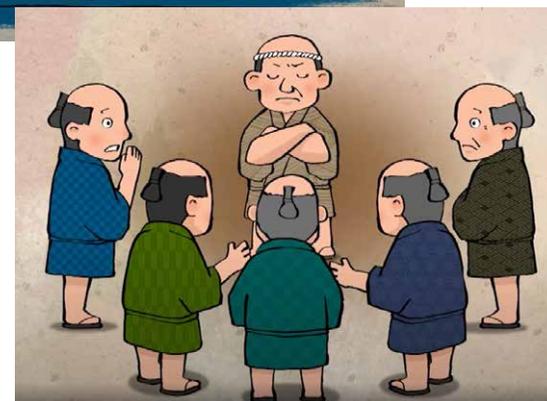
祓川東岸の宿に泊っていた三十人の参宮道者は、やみそうもない雨を見つめて困っていました。

そうして、嵐が去ったあとでも増水と濁流で、とても舟など出せない状態でした。

幾日も水が引けるのを待っていましたが、とうとうシビレをきらして、「今日こそはぜひ渡してほしい。」

「一番のりをして早く国へ帰りたい。」

と船頭さんに頼みました。





長い間、船頭をしている<sup>わきた かんべえ</sup>脇田勘兵衛さんは  
「この水ではダメだ！」  
と断りました。

けれども客は引きさがらなかったで、とうとう勘兵衛さんは  
「それでは渡してあげよう。しかしわたしと一緒に水死してもうらみませんか。」  
と言って舟を出しました。

勘兵衛さんが決死を承知でろをこいだのはいうまでもありません。

川の中ほどにさしかかった時、うずを巻く濁流にアツという間に全員吞  
まれてしまいました。

「大変や！」

「えらいことや！」

と、かけつけた船頭たちは、下流をくまなくさがし、全員の死体を引き揚  
げました。

そうして三十一人の死体をてあつく<sup>ほうむ</sup>葬っているところへ、遺族がかけつ  
けてきました。遺族は、身内の不幸を悲しむよりも、無理をたのんで大難  
を巻き起したとって、亡くなった勘兵衛さんや船頭たちに深く頭を下げ  
ました。

何度も何度も詫<sup>わ</sup>びをいい、大金をお礼において国へ帰っていきました。

船頭たちはそのお金で、毎年命日には<sup>ついぜん くよう</sup>追善供養を営み、当時の想い出  
を語り明かしてきたということです。



キーワード：みんわ、竹川、祓川、伊勢街道、お伊勢参り